

# 日本英学史学会広島支部 設立趣意書

わが国の歴史のうえに、最初の英人ウィリアム・アダムス (William Adams 三浦按針) が、オランダ船リーフデ号 (De Liefde 慈愛号) に搭乗して、豊後の国に漂着したのは、西暦 1600 年 (慶長 5 年) 春のことであった。この一事は、日蘭、中でも日英交渉史の曙ともなった一事件である。以降、東洋における英国の東インド会社の勢いは、オランダのそれを凌駕するようになっていく。1808 年 (文化 5 年) に至って、フェートン号 (Phaeton) 事件も生じている。このような人、物の交渉の盛行につれて、文化 11 年には本木正栄らの力で、「諳厄利亜語林大成」が成立する。この辞書の成立は、蘭学から英学へという、日本人の外国語享受の歴史的推移を示す一大変革であったといえよう。それは、辞書というものが、外国語をその時代の国語で記述したということのみならず、法律、経済、地理、宗教、医学、工学、文芸、思想等百般にわたっての事項を網羅しているものの成立であったからである。以後の日本の近代化に果たした英学の重要な役割は、かくして始まったといえるのである。

「英学」とは、英語、英文学、英語教育研究の分野のみを意味するものではない。それらの諸学を機軸としながらも、英語という言語そのものを媒介として行なわれる一切の学問の紹介、あるいは研究、さらにはその啓蒙等を総称するものといってよい。昨今、英語・英文学の研究は隆盛を極めるに至っている。一例をあげれば、シェイクスピア研究の業績量が 1964 年 (シェイクスピア生誕 400 年) には、欧米に匹敵したと伝えられるほどである。この隆盛の基をなしたものは、日本語と外国語との接触過程でえられた日本人の学問、すなわち「英学」に存したことはいうまでもない。凡そ、学問の水準が、ある段階に達すれば、その反省として必ずその学問自体の歴史に関心が向けられるようになる。学史研究によって、その学問のもつ現状を評価し、さらには将来への展望を与えようとするからである。

今日、自然科学、社会科学、人文科学のいずれの分野においても、それぞれの学史研究が進められ、それなりの高い研究業績をあげているとき。しかしながら、それらの諸科学の各個別の分野での研究よりも、さらに必要とされる「英学」という統合された、最も基礎的な分野での学史研究は、なお一定の位置を保ちえないままできた。1964 年 (昭和 39 年) 6 月、在京の研究者を中心に「日本英学史学会」が設立された。現在、この会を中心に、英学史研究は、おもむろに前進を始めたという段階にすぎないのである。

今回、わが国の英学研究にゆかりのある広島の地に、「日本英学史学会広島支部」を組織することを発意した。このことは、英学史研究の前進をはかることを可能にするとともに、会員相互の学的交換、親睦等を期す上で、意義深いものがあると信じたからである。身近かな人々の集まりは、学問的刺激を相互に与え合うことになるのではあるまいか。自らの研究の前進と進歩とにおいて、その専攻の如何を問わず英学史研究にかかわりのある方々は、この会に結集していただきたい。広島を中心とする地に住まいなせる有志の方々は、相当多いかとも予想する。とりあえず相識る者が集まって、「日本英学史学会広島支部」の発起人となった。ささやかではあるけれども、われわれの設立趣意を述べることによって、皆様のご参加をお誘い申し上げるしだいである。

1977 年秋

日本英学史学会広島支部設立発起人一同